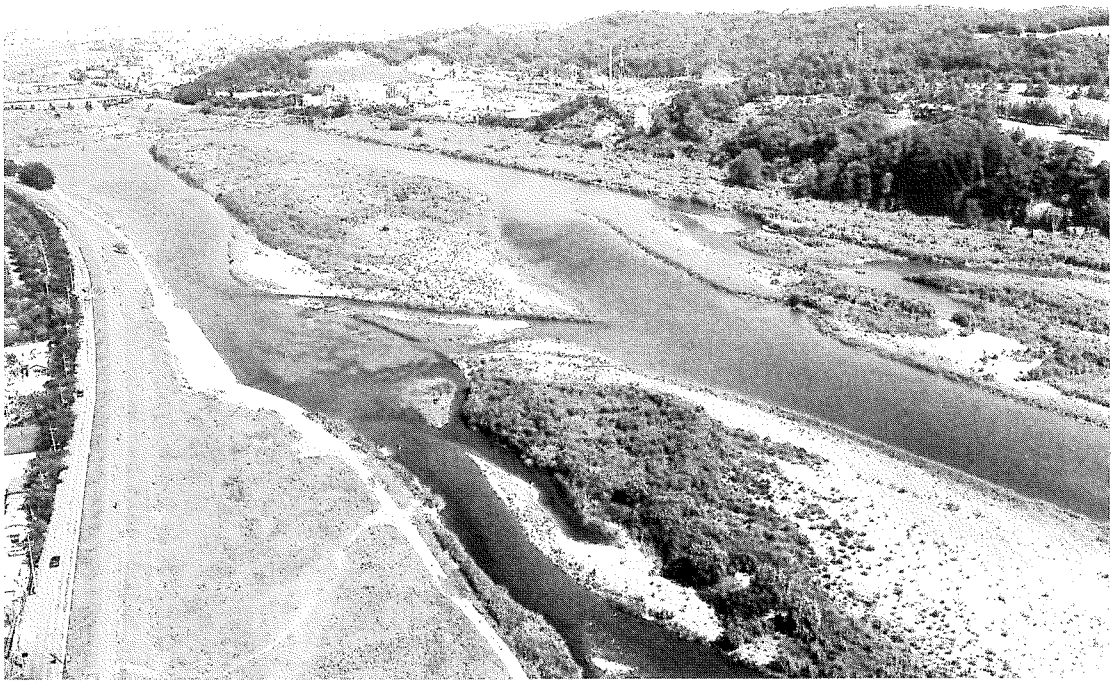
はくぶつかん　プラネタリウム　古民家園

あるむぜお

府中市郷土の森だより　№25　al museo



武蔵野の風景10 鍔山英次写真より **多摩川**

山梨県塩山市の笠取山中に発した小さな川は、東京湾めざして東へ延々138kmの旅を始めます。やがて、秋川や浅川などを合わせ風格を備えるに至った多摩川は、左に武蔵野台地、右に多摩丘陵を望みながら、ゆっくりと中流域にさしかかります。

奈良時代、左岸の台地上に国府が置かれると、武蔵随一の都市が発達し、右手の山あいでは、大量に必要な瓦や土器を焼く窯の煙が絶えずのぼっていたはずです。台地を抜ければ東山道、丘陵を越えれば東海道へ、道は遠く平城京や平安京に直結します。北の河原で大きな合戦が起きれば、戦禍は南岸の谷間の村里に及びました。歴史的な合戦が中世、いく度となくこの付近で繰り返されたのは、鎌倉街道の重要なルートがここで多摩川を渡っていたからです。近世の筏流しや鮎漁、近代の大規模な砂利採取事業のことも忘れることができません。

空から眺める多摩川は、歴史の興亡の証のように、実に表情豊かです。右手が多摩・稲城市域。大栗川が流れに加わろうとしています。左、府中市。郷土の森が少しだけ見えます。（○）

企画展・ＴＡＭＡらいふ21地域企画プログラム

展示会案内

農具は語る「多摩の近代」

9月19日(日)～10月31日(日)

府中市郷土の森博物館では、多摩地区にみられる農具のうち脱穀具を中心に、農具の地域性や近代化といった今日的な民具研究のテーマを設定し、企画展を開催します。

多摩の農具をひととおり概観してみると、まず多摩地区の地域性が顕著にみられるものがあります。例えばボウチに使われたクルリ棒は、多摩全域でみられるものですが、その打撃部の形状は、一本木のもの、割竹を束ねたもの、エゴを3、4本藁縄で束ねたものの3種類があります。府中ではエゴか割竹のものが使われ、今のところ一本木のものは確認できませんし、また使用した伝承も聞くことができません。ところが、多摩川を越えて多摩丘陵の方では一本木が使われ、エゴはみられないのです。もう少し範囲を広げてエゴのクルリ棒の分布を調べてみると、旧北多摩郡と川越や所沢といった埼玉県入間郡の南部、つまり多摩川と荒川、入間川に挟まれた、いわゆる武蔵野台地にしかみられないことがわかります。このようなエゴのクルリ棒の地域性は、ひとつの多摩の地域文化と捉えられますが、いかなる理由、背景によりこの地域文化が形成されたのか、またその新旧関係も併せて研究が待たれるところです。

次に、江戸時代に千歯扱きが出現して、大正年間に足踏み脱穀機が、そして昭和に入ってから動力式が導入されるといった、これら脱穀具の変遷は、農具の近代化のテーマには恰好の材料となります。多摩地区の博物館、資料館で所蔵している千歯扱きは、多く伯州倉吉(鳥取県)産のものがみられ、明治に入ると、八王子の田中富蔵のような多摩地区在住の千歯職人の出現をみるに至ります。田中富蔵に限らずカナコギ屋は多摩地区どこでも聞かれる屋号です。大正時代になると、川崎の細王舎の「ミノル式親王号」や川越の木屋製作所の「チヨダ式国光号」といった足踏み脱穀機が多摩地区に流通、普及し、あたかも多摩全地域を駆逐した観があります。このように農具の近代化とは、効率、合理化といった側面と、流通、普及といった側面を、併せもったテーマでしょうし、他の農具との関連はどうであったかなど、内在する課題は数多いと思います。

以上のように、クルリ棒や千歯扱き、足踏み脱穀機など脱穀具を中心に、唐箕や万石とおしといった調整具も含めて約70点ほど展示します。また大正、昭和初期の古写真も、農具の使用背景として展示する計画です。本展示会を通して多摩の農具を再考する場にしたいと思います。

さて今年は、多摩東京移管百周年です。各地でＴＡＭＡらいふ21の事業が開催、また計画されています。この記念すべき平成５年の日本民具学会大会が、府中市郷土の森博物館を主会場に開催されることになりました。同大会の日程のうちシンポジウムが一般公開となるなど、この大会を契機にして多摩地区の民具研究のますますの発展が見込まれると考えています。(G)

脱穀の風景―足踏み脱穀機

■第18回日本民具学会大会

公開シンポジウム

テーマ　脱穀―その地域性と変化―

日　時　10月24日(日)

午後１時15分～４時15分

会　場　府中市生涯学習センター・講堂

問合せ　府中市郷土の森まで

考古学入門講座

武蔵国府のはなし　その6

さて、これまで古代の武蔵国府についてお話してきました。まだまだ、話題はあるのですが、与えられた紙数が尽きてきましたので、最後にその後の国府の姿を探って、このシリーズを終わりにしたいと思います。

＝古代国府の終末＝

これまでに調査された2000棟を越える竪穴住居跡は、ほとんどが8～10世紀のもので、11世紀に入るものは僅かでした。さらに12世紀以後の住居跡は全くといってよい程見つかっていません。これは竪穴住居跡に限ったことではなく、12世紀以後の遺物すらほとんど発見されていないのです。

国府そのものが府中以外の地に移転したことは考えられませんから、その理由は住居形態の変化と居住地域の移動であったと想像できます。この考えを証明することは難しいのですが、11世紀代の竪穴住居跡は僅かに掘り窪めたものに変化しています。また、中世の遺物は崖線下の沖積低地から多く採集されています。したがって、地面を掘り窪めることのない住居へと変わるとともに、沖積低地に居住域が拡大したのもこの時期からと考えられるのです。

＝中世の府中＝

ここでは僅かな資料から中世府中の様子を眺めてみようと思います。

当時六所宮と呼ばれた大国魂神社の付近や足利尊氏再興と伝える高安寺からは中世の瓦が出土し、瓦葺きの堂宇が存在したことが窺われます。また、宮西町の長福寺からは中世の供養塔である板碑が100枚以上出土しています。さらに近年の発掘調査では、現在の府中街道に沿うように中世の遺構と遺物が見つかりつつあり、美好町では鎌倉街道と推定される道路跡が発見されています。しかし、崖線上の遺跡に古代のような広がりを見出すことはできそうにありません。

その反面、中世の遺跡は崖線下の沖積低地にも広く展開していました。現在の東京競馬場のなかからは、33枚の板碑が出土し、経文を納めた銅製の筒も出土したと伝えられています。これには「定光寺」と記され、ここに寺院があったことがわかります。また、矢崎町の三千人塚には多摩地区最古の板碑が今も立ち、火葬骨を納めた骨壺が出土しています。そしてもちろん、ここには水田が広がっていたことでしょう。

以上のように、中世国府の実態はまだまだ断片的にしかわかりませんが、崖線上では、六所宮や高安寺といった寺社の周辺、府中街道や鎌倉街道などの沿線に、コンパクトにまとまっていたと考えられます。一方、生産基盤である崖線下にも寺院が存在し、供養の場として利用されるとともに、居住域も拡大していたと想像できるのです。

いずれにしても、中世国府の解明はまだ緒に付いたばかりです。いつの日か、古代から中世へと続く武蔵国府の姿をより具体的に語れることを目指したいものです。（おわり）　（F）

脱穀の風景 —小説・童話・民話のなかから—

小野　一之

刈り取った稲や麦から、籾だけを取り除く作業を脱穀といいます。穀物の収穫には欠かせない重要で労力のいる仕事で、それだけに古来さまざまな脱穀用具が工夫されてきました。

それぞれの時代にそれぞれの場所で、脱穀作業をする農民たちの姿を、今回は小説・童話・民話のなかから垣間見てみることにします。手軽に入手できる文庫本からいくつか捨ってみました。

まずは、宮沢賢治の社会風刺的な童話『オッペルと象』(1926年)。小企業的な地主オッペルの「稲こき小屋」で小作たちが足踏み式回転脱穀機をフル回転させています。そこに純朴な象が登場。

① オッペルときたらたいしたもんだ。稲こき器械の六台も据えつけて、のんのんのんのんのんのんと、大そろしない音をたててやっている。十六人の百姓どもが、顔をまるっきりまっかにして足で踏んで器械をまわし、小山のように積まれた稲を片っぱしからこいて行く。わらはどんどんうしろの方へ投げられて、また新しい山になる。そこらは籾やわらから立ったこまかな塵で、変にぼうっと黄いろになり、まるで砂漠のけむりのようだ。そのうすくらい仕事場で、オッペルは、大きな琥珀のパイプをくわえ、吸いがらをわらに落とさないよう、目を細くして気をつけながら、両手を背中に組みあわせて、ぶらぶら行ったり来たりする。小屋はずいぶん頑丈で、学校ぐらいもあるのだが、何せ新式稲こき器械が六台もそろってまわってるから、のんのんのんのんふるうのだ。

② ところが何せ、器械はひどく回っていて、籾は夕立かあられのように、パチパチ象にあたるのだ。象はいかにもうるさいらしく、小さなその目を細めていたが、またよく見ると、たしかに少しわらっていた。

背景は大正期の東北の農村か。この頃、従来の千歯扱きに替わって、足踏み式の脱穀機が普及します。作業の能率化と裏腹に、こうした工場みたいな場面もあったのでしょう。

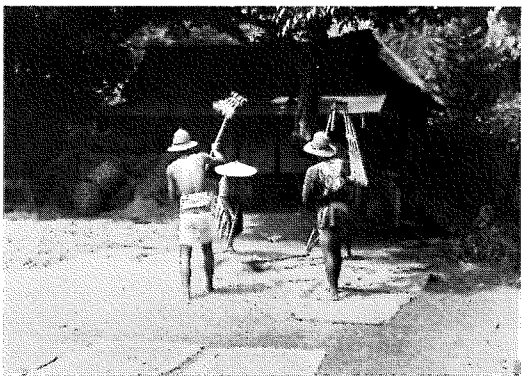
逆風に負けない健気な農民たちの姿をいつも描く住井すゑの小説。代表作『橋のない川』(1961年)の舞台は奈良盆地のど真ん中。次に掲げるのは、明治41年秋の陸軍大演習のあった直後の脱穀の様子です。

③ ふでとぬいも、誠太郎と孝二を弁当持ちで学校にやると、一刻を争うように荷車をひき出した。荷車には、稲こきに必要な、むしろ、金ごき、ふごの類。それに弁当と水の土瓶。耕地までは五町ばかり、決して遠い作り田ではないが、それでも、昼飯の往復につぶす時間が惜しいのだ。さて、演習前に刈った稲は、もう乾きすぎるほど乾いていて、尖った葉先がとげのように肌を刺す。ふでとぬいは、それを防ぐためにボロ前掛を首にまき、手甲も深く紐をしめた。

江戸元禄の頃に使われ出した千歯扱きは、細長い鉄の歯を20本くらい並べた道具で、金扱きともいいます。麦用のものもあります。

稲を収穫した後の田で麦を作る二毛作も広く行われていました。麦の脱穀は、忙しい田植えの前後にすることになっています。

④ その夜、孝二は母や祖母といっしょに金扱を並べて麦を扱いた。二反歩あまりの裏作収穫は七割まで稲作の肥料代に消えて、手もとに残る



脱穀の風景—クルリ棒

のはほんの僅かなものだったが、それでも盆の用にはこと足りる。それにことしは安いゆかたの一枚ぐらいは買えるかもしれぬ、などと、つい麦の穂にゆめがうまれて、のげっぽい麦扱きもぬいやふでには苦ではない。

同じ住井の『向い風』(1958年)は、敗戦直後の茨城の農村が舞台です。

⑤ あくる日は村早苗ぶりだった。いくは習慣通り赤飯をふかした。けれども、庄三も婆さんも、うまいともいわずにむしゃむしゃ食った。食ってしまうと、すぐ仕事である。乾し上げた大麦は、のげをこづき取って俵にしなければならぬ。穂のままの小麦は、さっそく脱穀機にかけねばならぬ。それに、畑の草。たんぼの草。昨日半日仕事を休んだのが、今日となってはいまいましい。

⑥ 「いや、よくわかった。俺はお前に言われて、はじめて目がさめたといってもいいくらいだよ。ゆみ、お前は、連枷だ。」「俺が連枷だって？」、「そうだよ。そして、俺は、殻をかぶっていた豆さ。ところがお前の連枷にぶたれて、俺という豆がはじけ出したんだよ。もし連枷でぶたれずに、いつまでも殻をかぶっていたら、豆は永久に芽を出すおりがないからな。」

連枷（唐棹・殻竿とも）は、クルリ棒ともいい、竹や工ゴの木で作った竿を回転させながら叩きつける脱穀の道具です。

ところと時代は大きく替わって、紀元2･3世紀頃のギリシア・レスボス島。『ダフニスとクロエー』は田園に芽ばえる恋の物語です。

⑦ 麦打場で女房のナペーと一緒に小麦を打っているドリュアースを見つけると、臆せず堂々と縁組の話をきりだした。「クロエーをぼくのお嫁に下さい。ぼくは麦の刈入れもちゃんとできるし、葡萄の剪定や植付けもできます。畑も耕せるし、風に当てて籾殻を散らす仕方も知っています。ぼくが家畜を飼う腕前は、クロエーが証明してくれます。ぼくは預かった五十頭の山羊を二倍にしたんです。昔は牝山羊をよその牡山羊と番わせなければならなかったんですけどね。」

⑧ 世間にはあまり例のないことであるが、息子を婿にもらいたいと二人に頼もうというのである。折から先方でも、籾殻をふるいとったばかりの大麦を量っているところで、播いた種子より少ないくらいの収穫しかなかったというのでがっかりしているところにでくわしたが、ドリュアースは、その悩みはどこも同じだといって二人を慰めた。

ダフニスが相手の親へ結婚の承諾を求める際に、脱穀がその舞台になり、また条件にもなっているのは、おもしろいことです。

最後に、イギリスの民話。脱穀のたいへんな仕事を妖精がしてくれるという夢のお話です。

⑨ 今から何百年もむかしのこと、あるよく晴れた朝、ダートムアの境に住んでいたお百姓が、自分の畑で忙しく野良仕事をしていた。ふととつぜん、興奮した叫び声が聞こえたかと思うと、〈ちっちゃな連中〉が納屋でいっしょうけんめい麦打ちをやってます、と下男が知らせに駆けて来た。ちゃんと声も、殻竿で打つ音も聞いたが、きっと小妖精たちだろうと思ったので、それ以上くわしくは調べてみなかった、と言う。そこでお百姓は、妖精たちが働いているあいだはどんなことがあっても納屋へ近寄ってはいかん、さもないともう二度と戻って来てくれんだろうから、と下男に言い聞かせた。こうして、忙しい小さな働き手たちは、納屋の中で好き勝手麦打ちをやらせてもらったが、やっと物音がすっかりやむのを待って、お百姓と下男は戸口へ近づいてみることにした。そっと用心深く納屋の中をのぞいて見ると、何と嬉しいことに、床の上には脱穀のすんだ麦の大きな山ができ、片側にはきちんと束ねた麦わらが積んであった。

正直爺さんとか鶴の恩返しの話が加われば、日本の民話にもちょっとありそうな話ですね。

◇引用した作品

①②宮沢賢治『童話集銀河鉄道の夜』岩波文庫 27、29p.
③ 住井すゑ『橋のない川(一)』新潮文庫 42p.
④ 〃 『橋のない川(二)』 〃 108p.
⑤⑥ 〃 『向い風』新潮文庫 32、266p.
⑦⑧松平千秋訳『ダフニスとクロエー』岩波文庫 116、117p.
⑨ 河野一郎編訳『イギリス民話集』岩波文庫 178p.

＝最近の発掘調査から＝

遺跡の発掘調査は、地下に眠るさまざまなモノからその地域の歴史を明らかにするために行われています。それは大昔だけに限らず、中世や近世の時代についても同じことが言えます。近年の中世遺跡における発掘調査の成果は、全国的に見ても目覚ましいものがあり、中世史研究の上で独自に各地域の中世史像を作りつつあります。ここ府中でもいろいろなものが見つかり、中世の府中の歴史が発掘調査によって明らかになってきました。ここでは最近見つかった常滑焼の大甕にスポットを当てて、中世の府中＝中世武蔵国府についてお話しましょう。

常滑大甕が見つかった調査地区は、宮町１丁目の大国魂神社前、旧甲州街道沿いのところです。ここは武蔵国の国庁推定地の１つ、京所地区の北側にあたり、竪穴住居跡が100軒近く見つかるなど、奈良・平安時代の武蔵国府を解明する上でも重要な地域の１つです。

さて、見つかった常滑大甕は地表面下約1.5m程のところに斜めに置かれていました。内部から人骨はみつかりませんでしたが、遺体を覆った布のような繊維質のものが底に付着していたことなどから、この大甕は埋葬用の棺として利用されたものでしょう。甕が埋納されたのは、その形状から今から500～600年前の室町時代の中頃と考えられます。この大甕が見つかったことを通して、中世武蔵国府の都市としての機能をめぐる興味深いいくつかのことが明らかになってきました。１つは、中世武蔵国府という都市における生活の場と墓域との関わりです。今回の調査地区の南西約200ｍのところから、昭和58年に今回見つかったものと大きさ、出土状態ともよく似た大甕が見つかっています。このことは、大国魂神社の周辺地域に中世甕棺墓群が存在している可能性を示唆しています。また地下式横穴墓と呼んでいる墳墓が、今回の調査地区の北西約200ｍのところに集中しており、この一帯に中世都市武蔵国府の墓域が構成されていたと考えられます。ただしこの地域では同じ時期の井戸跡なども確認されていることから、生活の場が離れたところにあったのではなく、生活の場と墓域が共存していたことがうかがわれます。

また、この甕が現在の愛知県常滑市周辺で焼かれ、はるばる府中の地に運ばれてきたことが重要です。これだけ巨大な甕が陸上経路で運搬されたとは考え難く、海の道が使用されたことは明らかです。最近の文献史学の研究成果から、室町時代には太平洋域の海運の発達によって遠隔地間の広域流通が成立していたことがわかってきました。さらにはこの海の道の発達とともに、内陸の河川交通の発展があってはじめて、多摩川を遡って大甕がこの地に搬入されてきたのでしょう。そこから海、川を通じての水上交通が武蔵国府という都市機能の形成に当たって重要な意味を持ち、さらにはその発展を促したことが考えられるのです。

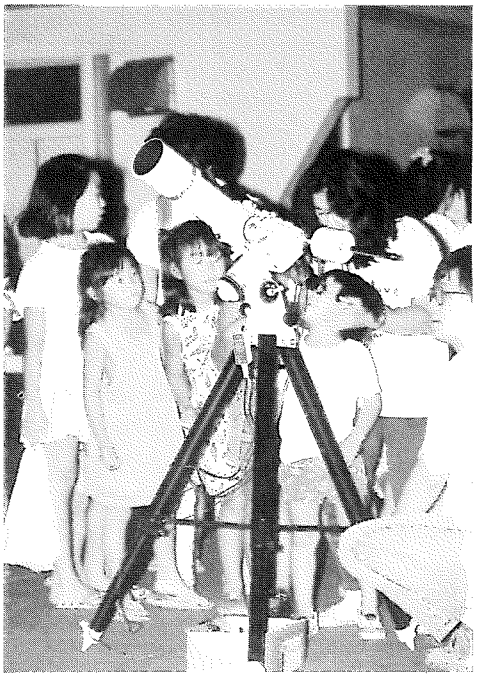
現在府中の地はビルの建ち並ぶ市街地となっていますが、発掘調査によって眠りから目覚めたさまざまな資料は、私たちに中世の世界を語りかけてくれるのです。

（府中駅南口再開発事業地区の調査から　江口）

カメラアングル

あなたは、流れ星を見ましたか？
期待されたペルセウス座流星群、
まずまずの結果でした。

プラネタリウムと移動天文観測車“ペガサス”
のある郷土の森では、
星空に親しんでもらう機会をいつも用意
してお待ちしています。



あれこれ　農具の周辺

—刈った稲を干す—

下の写真は、郷土の森の体験学習「こめっこクラブ」の稲刈りの様子です。すっかり色づいてきた稲穂が、そろっておじぎを始めたら、いよいよ稲刈り。秋も深まっていく10月末頃のことです。ノコギリ鎌で1株1株刈って、8株くらいで束ねると、これをワラで縛り、丸太で組んだ台に端からすき間なくぶら下げていきます。

脱穀までの間の2、3週間、稲を乾燥させておくためです。

刈った稲を干す方法や形は、地方によって実にバラエティに富んでいます。ハサ、ハザまたはオダなどと呼ぶ、竹や丸太で組んだ台を作ったり、自然木を利用したりします。一面黄金色の穂の波が、端から刈られ干されて一変していく光景は、豊かな稔りを象徴するようで、誰の目にも感慨深いものがあります。

ところで、稲を干すには、以上のような「かけ干し」の他に、「ひら干し」の方法があります。刈った稲を根元のところに寝かせると、次の株も少し重ねるように次々と置いていきます。実は府中のあたりは、ほとんどこの方法で稲を干していました。天気を見図らって稲刈りの日程を決め、干している間に雨が降ってしまうと、そのたびに稲束をひっくり返さなければなりません。それでも、「丸太を手に入れて組む手間を考えると、かけ干しにする気にはなれなかった」と、ある農家の人は当時を語ります。もっとも、砂質で水引きのいい田だったからこそできたのでしょう。

近年は、刈った稲を雨でさんざんやられた苦い経験が重なり、また農協が鉄パイプ製の3段式の軽便な脚を売り出したこともあり、ほとんどの農家が「かけ干し」にするようになったようです。稲刈りが機械化されたのと同時期のことです。　（O）

インフォメーション

自然と文化に親しむ秋……。郷土の森の毎月定例の催し物をいくつかご紹介します。参加自由です。郷土の森で毎月お会いしましょう。

植物を探りながら秋の野を散策する**自然観察会**は10／17(日)・11／21(日)・12／26(日)、いずれも10:00～、集合場所はお問合せください。農家のイロリ端で民話や昔話を聞く**森のお話会**は10／9(土)・11／13(土)・12／11(土)、いずれも14:45～、園内旧越智家にて。気軽に参加できるお茶会**梅欅庵月釜**は、10／10(日)・11／14(日)、いずれも11:00～15:00、園内茶室にて。夜空の月・土星・星雲星団を観測する**星空観測会**は、10／23(土)・11／13(土)・12／18(土)、いずれも18:30～。太陽の黒点などを探る**太陽観望会**は、10／9(土)・11／13(土)・12／11(土)、いずれも10:00～。

あるむぜお　第25号

al museo　イタリア語
"博物館で"　"博物館にて"の意

発行日　1993年9月20日

発行　府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921